足利尊氏〈あしかがたかうじ〉と二重川〈ふたえがわ〉（山南町）

室町幕府〈むろまちばくふ〉の初代〈しょだい〉将軍足利尊氏が、身をかくし、「九死に一生を得〈え〉た」川があります。
身をかくしたのは、橋の下ならぬ、「川の下」で、岩屋谷川と用水溝〈みぞ〉が十字形にまじわり、川の下を溝〈みぞ〉が横切っている二重川〈ふたえがわ〉です。

時は、後村天皇正平六年（一三五一年）負〈ま〉け戦でにげていた足利尊氏は、楠勢〈くすのきぜい〉に追〈お〉われ、丹波路〈じ〉の氷上郡山南町にはいりました。山南町梶〈かじ〉付近で一戦をまじえた尊氏は、首をおとされるところでしたが、うまく切りぬけて逃〈に〉げのびました。しかし敵勢〈てきせい〉は、しつこく追いかけ、「敵将尊氏は、たしかこのあたりまで落ちのびたと思われるぞ、者共〈ものども〉、草の根を分けてもさがし出せ。」と、命令する声が聞えます。
尊氏のかくれたのは、井原〈いばら〉にある二重川で、川をくぐる部分の溝〈みぞ〉の長さ約十一メートル、幅〈はば〉二メートルの暗〈あん〉きょになっていて、中はくらく、藻〈も〉がはえていて、見通しがつかないところで、尊氏が身をかくすのには、もってこいの所だったにちがいありません。この溝〈みぞ〉の奥ふかく身をかくし息をころす尊氏の首すじには水が、ポトポトと、ふりそそぎ、それでなくても重いよろいを、よけいに重くしました。
追手〈おって〉は、敵の大将を首尾〈しゅび〉よく討〈う〉とうと目を光らせて、暗〈あん〉きょの東と西から長い槍〈やり〉でついたが、深くて暗く長いのがさいわいして、みつかりませんでした。
追手〈おって〉の足音が遠ざかる頃、夕やみが二重川をとりつつみました。その時です、あたりが急にザワザワしてきました。尊氏は敵が再びきたのかと、またも身をひそめて、じっと息〈いき〉をのみました。
「足利将軍では、ございませんか。」そんな声が聞えました。
「敵ではない。」そう思うと、もう二重川の底から出て立ち上っていました。
「尊氏はここにおるぞ。ハハァッー。」相手の武士たちは、夕やみの中にひざまづきました。
「久下弥三郎時重〈くげやさぶろうときしげ〉でございます。」「ようやく、おたすけにまいりました。」
「よおし！満足〈まんぞく〉におもうぞ。」と、尊氏はカづよくいいました。
やがて尊氏は、玉巻城主〈たまきじょうしゅ〉、久下弥三郎時重にたすけられ、ちりちりになっていた一族をかりあつめました。命びろいをした尊氏は、子の義詮〈よしあきら〉を岩屋石龕寺〈いわやせきがんじ〉にとどめて、自分は西国へおちのびました。

この二重川は、昭和三十年ごろ岩屋谷川の川底〈かわそこ〉を掘〈ほ〉り下〈さ〉げたため溝は、サイホン型になっています。
地方のお年よりは、ここを「陰〈いん〉の元〈もと〉」といっており、この川にかけられた橋を足利橋と呼んで、今もそのいわれをつたえています。